

日本語の簡約化と文体という視点

中川正弘

0. はじめに

日本語は外国人が勉強するには「複雑でむずかしい」とよく言われる。そこで、外国人にとって勉強しやすい簡約日本語を作る、そう考えて、1998年に国立国語研究所が「簡約日本語」の開発を発表したとき、この提案自体にはだれも反対しなかっただろう。ひじょうに有意義な提案と思われたはずだ。

日本語が「複雑でむずかしい」としても、それは仕方のないことなのだからあるがままに受け入れるべきだと主張する人はいるだろうが、「複雑でむずかしい」ほうがいいと考える人はまずいない。学習者にとってやさしくできるならそのほうがいいと普通は考える。

ところが、例として示された日本語を見て、だれもが驚いた。あまりにも変わった日本語に見えたからだ。そして、このようになってしまうなら簡略化なんてするべきではないとだれもが思ったようだ。

しかし、よく考えてみよう。このただ一つの案を見ただけで、「簡約日本語」という提案自体を否定できるだろうか。これはあくまで一案に過ぎないはずだ。この案が拒否されたとしても、目的自体が承認されるものであれば別の案を作ればいいのではないだろうか。

それから数年後、新しい提案が出されていないことを確認して、評論家の呉智英がこの試みを揶揄している。その論点は、簡約日本語が提案され、一部の例が発表された直後の一般の反応と違いがないようだ。このように異様な日本語は断じて受け入れられない、自然のままに置かれるべき言語を外国人のために人為的に簡略化しようなんて愚かな試みだと述べている¹。

その後、提案者も沈黙したままの「簡約日本語」という提案は無効になったのだろうか。筆者にはそうは思えない。日本語学習者が「複雑でむずかしい」と感じるのは、日本語を教える者がそのようにしか扱えていないからかもしれない、文法が完全に説明しきれること、さらに自然のままの日本語が完全に説明できることはやはり理想だろう。

提案された「簡約日本語」はその概念定義からして、日本語文法に、図形を考えやすくするための補助線のような大まかな線引きをし、茫漠とした日本語文法の全体像を理解しやすくしてくれるように思える。

それなら国立国語研究所が提案した「簡約日本語」の問題はどこにあるのだろうか。実例として示されたもののでき具合にはではない。それが唯一可能な簡約日本語としか考えず、別の提案ができないでいること、そこにあるのではないだろうか。そして、それが筆者にはひじょうに興味深く思える。

本稿では、この案とそれに対する批判を今一度検討し、日本語における文法の問題を考

えてみたい。

1. 同義性と多義性

簡約日本語は次のような書き換え例で示された。

A 通常日本語

まず北風が強く吹き始めた。しかし北風が吹けば吹くほど、旅人はマントにくるまるのだった。遂に北風は、彼からマントを脱がせるのをあきらめた。

B 簡約日本語

まず北の風が強く吹き始めました。しかし北の風が強く吹きますと吹きますほど、旅行をします人は、上に着ますものを強く体につけました。とうとう北の風は彼から上に着ますものを脱ぎさせますことをやめませんとなりませんでした。

国立国語研究所の簡約日本語案では、語尾は「だ・する」を除外し、「です・ます」に統一する。動詞の活用形は「ます」につながる連用形に限定し、単語の意味は一語につき三つまでにする。一つの考えを表すには一つの言葉があればいい、同義的に使われる言葉はないほうがいい、あるいはなくていいというわけだ。語尾なら、「だ・する」と「です・ます」のどちらになつていようと、伝えられる考えは同じで、外国語から日本語への翻訳、日本語から外国語への翻訳でどちらでも使える。また、活用については、人称・時制を表すわけではなく、接続してゆく文法機能・構文関係自体は明確なのに、それに合わせて動詞の音が変化することなど必要はないと考えるようだ。そして、その裏返しであるが、ひとつの言葉を場面によりさまざまな違った意味で使うことが日本語の問題だと考える。要するに、言葉と意味を一对一の理想的な関係に近づけようとするのだ。

「北風（きたかぜ）」を「北の風（きたのかぜ）」にするといくらか抵抗がある。しかし、「南風（なんふう・みなみかぜ）・南の風」「西風（せいふう・にしかぜ）・西の風」「東風（こち・とうふう・ひがしかぜ）・東の風」を比べると、天気予報でもそうだが、総合的に頻度のもっとも高いものが「～の風」ではないだろうか。また、「キタカゼってなんですか」と聞かれたら、「北から吹く風、北の風」と、特に簡略さから「北の風」と使いやすいぐらいで、複合語の作り方としてはもっとも基本的なものであり、これに替えておかしいとまでは言えない。

外来語は使わないようにすると、「マント」は「外套」でいいのではとも思える。しかし、翻訳語の常でもあるが、特に用途やデザインがさまざまで、時代により変化する衣服の翻訳語はあつと言う間に陳腐化する。かつては「外套」で済んでいたとしても、現在では「オーバー／コート／マント」のどれかになるだろう。「外套」とすれば、現在日本人

はどんなものを想起するだろうか。この言葉が普通に使われていた時代の、時代がかった衣服だろう。

これらの言葉のどれについても、子供が「～って何？」と訊いてきたら、「服の上に着るものだよ」と答えるぐらいであり、「上に着るもの・上に着ているもの」は一般性が高く、どこで使っても違和感はない。

国立国語研究所の考える「簡約化」は人為的で愚かな政策だとうんぬんする前に、考えてみると、これらは「中心」から「周辺」への自然な階層を示す日本語の実際の使われ方自体が支えていることが分かる。「簡約化」が提案され、その理念だけなら承認できると感じるのも、そのためだ

だが、動詞に「ます形」しか使わないとなると、「マント」は「上に着ますもの」になる。このような言葉を聞くと、ほとんどの日本人が普通の言葉遣いとは違い、過剰に上品だと反応するはずだ。それほど「表現性」がある。

このような反応、これは文法の領域にあるだろうか。同義性、多義性は文法の視点から見ることでもできるのだが、言葉の使い方は社会習慣に属しているとも言え、文法学の隣接領域である文体、レトリックの視点から見た方がいいように思える。

2. 簡約日本語と丁寧体

A、Bのように二つの文章を並べると、呉智英に限らず、たいていの日本人は、簡約日本語は「不自然でおかしい」、こんなものにしかならないのなら、手を加えて簡略化などせず、どんなに複雑で難しかろうと、それを甘んじて受け入れるべきだと考えるだろう。

しかし、よく見てみよう。ここに示された「通常日本語」は果たして「複雑でむずかしい」日本語だろうか。筆者にはかなり「簡略」な日本語に見える。

「簡略化」前として示されると、相対的に「複雑でむずかしい」と思いやすいだけで、これはまったく「普通」の日本語、それも小学生が「むずかしくない」と言えるぐらい「簡略な日本語」だろう。

このような書き換えが簡約日本語の例として発表されたとき、批判され、またしばらく後に呉に揶揄されたのは「簡略化とは異常な言語を作る」と見えたからだ。しかし、今述べたように、すでに「簡略な」日本語を簡略化前、つまり「複雑でむずかしい」と位置づけ、これを簡略化すると、簡略化は行き過ぎることになる。「異常」と見えて当然だ。これでは「簡約」とは言えない。

	A		B
国立国語研究所	通常の日本語 (複雑でむずかしい)	→	簡約日本語 (簡略)
普通人	簡略な日本語	→	異常な日本語

それでは、難易度に関する国立国語研究所の判断が誤っていたのか。そうではない、この難易度は話の発端から日本人の感じるものではなく、日本語を学ぶ外国人の反応、主張に基づいているはずなのだ。英語に翻訳すれば同じになってしまう言葉、つまり同義語とも見なせる言葉が日本語ではいくつも選択的に使われていることが学習者にとって「難しい」と感じられる。外国人に対する日本語教育で説明のために与えられる英語などの翻訳では一般的に区別されない言葉、また区別はされていても、その区別がそれほど重要とは認識されておらず、一つにしてしまっても現実にはたいして問題がないと考えられている言葉は簡略化のために削減してもよさそうに思われる。

示された書き換えの例文には簡略化のポイントがいくつか含まれているが、日本人が読んで「異常」だと感じる一番の原因は、動詞の形を**ます形**に統一しようとしていることではないだろうか。この短い文章の中になんと 10 箇所も表れる。

日本語教育ではほぼ例外なく「丁寧体（です・します）」を最初に教える。第一のもの、標準として扱おうとするのが「丁寧体」である。「普通体（だ・する）」は初級日本語の中盤あたりでやっと取り上げるだけで、普通というよりは、「辞書形」という名称で何物でもないかのような扱いをしたり、会話で選択肢となる「ぞんざいな／くだけた」調子として補足的に対比させるだけだ。

外国人が適当に「普通体」を使うと、それを日本人が「無礼／ぞんざい」と感じ、コミュニケーションにおいて問題の生じる場合が確かにある。だから、「丁寧体」だけを使わせればその心配がなくていい、日本語を簡略にするなら、まずこのスタイルの選択をというわけである。

しかし、これは大きな考え違いだ。このような書き換えをして、簡約日本語が通常の日本語よりやさしく見えるわけがない。「普通体」「丁寧体」はただ対等なスタイルの選択肢としてあるのではない。この名称が意味するのは「丁寧」ではないものと「丁寧」を付加したものの対立だ。従って、日本人であれば当然「普通体」が簡略なもので、「丁寧体」は簡略ではない、つまり使うための努力がある程度必要だと感じるはずである。国立国語研究所の提案ではそこが考慮されていない。これは大きな問題だ。

また、日本語教育関係者に広く共有されているように思える考え方、「丁寧体しか知らなければ、丁寧な表現しかできないため、無礼、ぞんざいにはなりえない」という考え方にも誤りがある。

本当の意味で丁寧な表現が使えているためには、「です・ます」を使うことの裏腹に「丁寧ではない」表現、つまり「だ・する」の普通体を選ばないという側面がなければならぬ。「丁寧体」はこの二つの選択肢から選ぶことによって初めて「丁寧」な表現となるはずだ。

とはいえ、発言者が聞き手に対して、書き手が読み手に対して敬意を持っているかどうかは実際にはこのスタイルの選択のみで表されるわけではない。話題の選択や展開のさせ方、会話であれば表情、仕草すべてが結びついて表される。

丁寧体を使っているのに、敬意を表現しているように見えていても、実際にはこれを選ぶことができず、「です・ます」だけを使っている外国人は、例えば「財布を落としてしまいました時、わたしは『どうしますか』と思いました。』のような日本語を使う。このような日本語を聞いた、あるいは読んだ日本語教師は、ちょっと変な感じがするが、全体的に「丁寧な」だけだから悪くはないと判断しやすい。

メッセージの受け手である日本人には敬意が込められていると思え、それは状況から見ても間違いのないのだろうが、このような言葉の選び方には、自分と相手の相対的な位置づけが含まれていない。「普通体」と「丁寧体」が選べる状態の中で「丁寧体」を選んだのではないのだから、これは厳密には「丁寧」な表現になりえない。これが「丁寧」だと思えるのは、聞き手、読み手の使う日本語にそのような選択性があるためだろう。話し手、書き手の意図が完全に理解できるかのような言語伝達のイメージは非現実的だ。現実には有効な解釈がそのように信じさせるだけである。

それが「丁寧」だと信じていても、それしか使えなければ種類の違う「普通」でしかなく、敬意表現とは言えない。「普通体」が「普通」と感じられるのは聞き手、読み手のことを配慮せず、頭の中で考えるとき、独り言を言うときに使われているものをそのまま外に出して使う**零度のスタイル**だからである。

さまざまな文化、習慣が言語として形式化、制度化されるが、多くの意味の空洞化の例が知られているように、表現価は不変ではない。「です・ます」が使われているから敬意が込められていると考えるのは安直すぎる。

日本語教育では、現在「です・ます体」は丁寧というより普通に近づいている、また、「だ・する」は普通ではなく、「無礼・ぞんざい」に思われる、と定義を修正されたりもするが、それはどちらか一つしかない状態では起こり得ない表現価のずれであり、二つが相対的にしか規定できないものであることをやはり示していよう。

3. 簡略化の方向

前段で、「だ・する」の普通体を簡略化前の通常の日本語とし、「です・ます」の丁寧体を簡略化した後の日本語と位置づけたことがおかしいと述べた。これは、順序を逆にして、丁寧体を「通常の日本語」とし、普通体を「簡約日本語」としていれば、それほど非難

は受けなかったのではないかということの意味する。その場合の書き換えによる変化を見てみよう。

A' 通常の日本語（普通体ではなく丁寧体とする）

まず北風が強く吹き始めました。しかし北風が吹けば吹くほど、旅人はマントにくるまるのでした。遂に北風は、彼からマントを脱がせるのをあきらめました。

B' 簡約日本語（丁寧体ではなく普通体とする）

まず北の風が強く吹き始めた。しかし北の風が強く吹くと吹くほど、旅行をする人（旅人）は、上に着ているものを強く体につけた。とうとう北の風は彼から上に着ているものを脱がせるのをやめないといけなかった（あきらめた）。

B'のような日本語であれば、まだ何箇所か抵抗を覚えるところがあるだろうが、「うまい」とまでは言えないだけで、実際に提案されたBのように「異常」とはもう感じられないのではないだろうか。「旅人」「あきらめる」という語彙をそのまま簡約日本語で許容していれば、抵抗はほぼなくなる。すると、国立国語研究所が出した簡約日本語の案では「丁寧体」と「普通体」の位置づけ、その扱い方がおかしかっただけと言えるだろう。しかし、これにはまだ別種の問題が関わっているようだ。

4. スタイルの選択-文法と文体

普通体は親しい者とのくつろいだ会話で用いられる。また論文・レポートのように明快であることが求められる文章でもこの装飾性のない「だ・する」の普通体が用いられる。

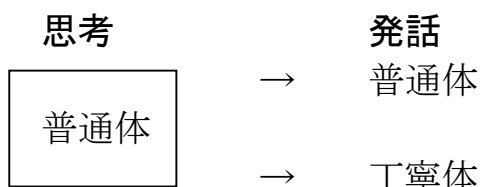
「です・ます」の丁寧体が使われるのは目上の人、距離を取った方がいい初対面の人に対してである。二つのスタイルの違いは、衣服で言えば、カジュアルとフォーマルの違いぐらいにしか思えない。しかし、それは書かれた言葉、話された言葉だけを考えた場合だ。

日本語教育では一般的に二つのスタイルを単なる選択肢として対比し、結局は自由に選択できるもののように扱う。そう考える限り、まさに衣服のようで、簡素化のためにどちらか一つにしようとする場合、フォーマルだけにすればいいとも思えるし、カジュアルだけにすればいいとも思える。丁寧体はつねにこれを使うほうが無難だと勧められるぐらいだし、逆にいっさい丁寧体を使わず、普通体だけで押し通しても、そっけない、無礼、くだけたとは思われるだろうが間違いになるわけではない。

しかし、言葉は単に思考にまとわせる衣服のようなものでしかないのだろうか。そのような使い方をしないわけではないが、何よりも重要な言葉の使い方とは思考そのものとなることのはずである。

「普通体」と「丁寧体」の関係はカジュアルとフォーマルの選択的關係であるだけでは

ない。日本人の発話、書き物ではどちらのスタイルも使うことができ、現に使われているのだが、外に表される前の思考、つまり裸の思考は「普通体」か、これに極めて近いスタイルである。これは身体とそれがまとう衣服の関係でもあるということだろう。



厳密に言えば、外言の普通体は率直さにおいて裸に近いだけだし、内言の普通体は「体」以前の不分明で断片的なものまで含み、いくつかの位相が考えられる。しかし、基準である普通体に何ものかが加わって丁寧体が成立するのであり、丁寧体を基準としてそこからこの意味を差し引いて普通体が成立するのではない。もし、「です・ます」が普通のように感じられるなら、「だ・する」普通体(±0) / 「です・する」丁寧体(+1)ではなく、「だ・する」無礼体(-1) / 「です・ます」普通体(±0)と感じられているだけだ。だとしても、思考がこの「です・ます」普通体で行われるわけではない。このような判断は主観的なものであるため、文法の視点をとろうとするとあまり積極的に取り上げられない。しかし、言語は客観的に規定できるものだけでできているわけではなく、さまざまに主観が介入し、表現が行われるものだろう。

	感覚A	感覚B
だ・する	普通体(±0)	無礼体(-1)
です・ます	丁寧体(+1)	普通体(±0)

日本語をいくらか学んだ外国人がこの簡約日本語の例文を見るとどう感じるだろうか。呉智房、多くの日本人と同じように異様な日本語と感じるだろうか。おそらくとても読みやすく平明だと言うだろう。二つの体の位置づけを教えられている者はほとんどいないのではないかと思えるほどだからである。深刻に捉えられてはいないが、これは日本語能力の根幹に関わる問題と言えなくない。ⁱⁱ

外国人を対象とした場で経験的に有効だったからだろう、冷静に考えると定義になっていない「辞書形」のような文法用語、普通の日本人にとっては違和感のある例文、えっと驚くような分類法も日本語教育では使われる。そんな中では「です・ます」と「だ・する」

の区別など取るに足りないと思えるのだろう。簡約日本語の例が示しているのはこれからの国際化の時代に相応しいものとして新しく作ろうとする日本語というより、実はこれまで、そして現在も使い続けられている日本語教育の文法観そのものであり、慣例のように思える。

簡約日本語の見本はどうして物語にしたのだろうか。物語という形式はそれほど自由ではなく、文法の領域に収まらない伝統が暗黙の制度となっていることが多い。ただの叙述文か会話であればこれほど不快感が表明されることはなかったかもしれない。外国人の使うおかしい日本語を聞いて、「間違い」と感じるより、外国人らしさの表現とを感じる日本人がひじょうに多いからである³。

文法と文体・修辞との境界が非常に問題だということを示す例をひとつ挙げておこう。助詞の「は」は、格を表示し、明らかに文法に属す「が」などの格助詞との交替、選択があるため、同じように文法の領域に属するものと扱われ続けている。そして、これについては、西洋言語にはない日本語独特の文法項目だと一般的に考えられる。しかし、よく考えてみよう。提題、主題（対比、新情報／旧情報などはそれを使う場面を示すに過ぎない）のような構文要素の概念、言葉の使い方が西洋言語にないというのだろうか。そんなものはどの言語にもあるはずだ。ただし文体・修辞や発声表現にである。ないと見えるのは「文法」に含まれていないからだ。

「は」については「が」など格助詞との区別ばかり追い求めていると、どうしても文法的、つまり客観的な定義をと考えてしまう。だが、本質を間違いなく捉えている「主題（提題）」という定義が日本語学習者への説明として実際どれほど有効に働いているだろうか。この概念を示すだけでは学習者だれも得心が行かないように思う。「は／が」という二つの選択肢が「主題／主語」という別の名称の選択肢に置き換えられただけだからである。それで、「どんな時に使えばいいか」と質問されるから、やはり使われる場合を客観的に定義しようとする。しかし、そこで示す構文例、文脈例は、典型的ということではできても、必ずこれを使わなければならない条件とはなりえないものが多くなる。

どうしてそうになってしまうか。「文法」という概念に強く拘束され、客観的に「使われる場合（文法的にと言うなら、厳密には『使わなければいけない場合』でなければならぬ）」しか示そうとしないからである。しかし、「は」について本当に知らねばならないのは多くの場合主観による表現的な「使い方」だろう。

どんな時に日本人が「は」を使っているか。客観的に規定できるある状況に置かれたために提題の「は」を使うと考えるか、それともこれを使うことで何かを表現、伝達しているかと考えるか。分かれ道はそこにある。「その言葉でその言葉の意味以外の何かを表現、伝達する」、これは文法の問題ではない⁴。

「あなた、お名前は？」【→何と言いますか】

「私はブタ肉は食べません。」【→他の肉は食べますが】

「来る人数ですか。10人は来ます。」【→10人は確か→10人以上】

「わたしはビールがいい。- ぼく、お酒はいいです。」【→お酒はなくていい】

このような発話例で聞き手が理解するのは、表面に表れた言葉の意味だけでなく、「は」による提題によって暗示される不在の、沈黙の言葉だろう。

5. おわりに

「簡略化」というのは複雑なものを単純に分かりやすくすることであり、ただ単に量を少なくすることではない。節約がただコストを下げるだけではだめで、品質を保持できなければ無意味であるのと同じだ。「本質的」なものは残されねばならない。

簡約日本語が必要だと認識されながら、提案されたものが拒否されたのは、簡略化そのものが否定されたのではなく、本稿で論じたようにその案が本質的なものを落としてしまっていたからである。しかし、このような顛末から、この計画が挫折、収束したと見なすべきではない。落としたものの中に日本語にとって本質的なものがあつたことが分かったと肯定的に考えることができるからだ。次の段階でそれが何であるかはっきりさせればよいだけだ。そうすればその本質的なものを残した簡約日本語の次の案が作れる。

簡約日本語は当然のように文法の領域の問題と考えられたのだが、日本語教育関係者や文法学者ではなく批評家がこのような形で物言いを付けたこと、またその批判が実際には「文法」にではなく、「文体」に向けられていることに注目しなければならない。批評家は文法構造がおかしくなると批判するのではなく、自身の文体感覚、つまり主観に基づき、こんな日本語の文体はおかしいと言っているのである。論点はずれている。しかし、だからといって、このような批判を無視していいと考えるべきではない。日本語に関してどこまでが文法で、どこからが文体・修辞・社会習慣であるか、その線引きが西洋言語の文法と同じようにはできないということを確認すべきだろう。

過去、「日本語には文法がない」と発言され、議論されたこともあつたが、そのような意見に対して、西洋言語の文法を基準とするのが間違いで、どの言語にも文法はあると一般論で返すだけでは充分ではない。日本語の使い方のどこまでが文法と扱えるか、また文法の領域が画定できたとして、その文法をどのように使うことができるかまで考えねばなるまい。

文法は言語にとって最も重要なコアであったとしても、その限りにおいてその言語の全体から見ればごく一部に過ぎず、文体、修辞などと同列に並ぶ。従って、文法を考えるためにはその内側においてその内部、内壁を見るだけでなく、文法の外から、つまり文体や修辞の領域から見ること必要だろう。(了)

-
- ¹ 呉智英、犬儒派が語る世界のキーワード、「国際通用語」、毎日新聞、2002年6月4日
- ² 日本語教育において二つの体の位置付けが問題であることについてはすでに論じた。
中川正弘、添削文が語る日本語のスタイル-(2)言葉の選択と序列、『広島大学留学生教育』第2号、1998年、3月
- ³ 外国人の使う日本語の誤りが日本人にどのように見えるかについては、以下の論文において論じた。
中川正弘、作文の誤りと文体、広島大学留学生センター紀要、第3号、1993年
中川正弘、作文と解釈行為、広島大学留学生センター紀要、第4号、1994年
中川正弘、外国人の日本語、日本人の日本語 -言葉の問題から教授法の問題へ-、『広島大学留学生日本語教育』第6号、1994年
- ⁴ 助詞の使い方を文法としてではなく、社会習慣につながる文体・修辭的行為と見ることができることについてはすでに論じた。
中川正弘、「は／が」と助詞選択の零度、『広島大学留学生日本語教育』、第8号、1996年